

# 『自叙伝』の改稿

— 森田草平研究 (一) —

石 崎 等

一、はじめに

二、『自叙伝』のテキストならびに改稿の概観(以上、本集)

三、改稿の問題点(次集)

## 一、はじめに

『自叙伝』は、小栗風葉の『極光』(明43・11・19～44・4・26)の後を承けて、明治四十四年四月二十七日から七月三十一日まで「東京朝日新聞」に九十回に亘って連載された森田草平の自伝小説である。『煤煙』のときほどではないが、六回の休載がある。夏目漱石の推輓により、明治四十一年三月下旬、平塚らいてうとの塩原尾花峠の情死行末遂事件から、起死回生をねらって書かれた『煤煙』(明42・1・1～5・17「東京朝日新聞」)以来、約二年ぶりの新聞連載長篇小説の執筆ということになる。朝日新聞の方では、その間、二葉亭四迷の死去があり、以後は漱石の小説を主軸に連載がほぼ間断なく継続してゆくことになるのだが、それらの作品群は一体どんなものであ

たのか、一通り目を通しておくことにする。

『其面影』(明39・10・10～12・31)のあと、漱石の朝日入社により、『虞美人草』(明40・6・23～10・29)、『平凡』(明40・10・30～12・31)、『坑夫』(明41・1・1～4・6)と続いできた二葉亭と漱石による交互の連載形態は、明治四十一年六月、朝日新聞露西亞特派員として二葉亭が訪露するという事情によってくずれるが、以後は島崎藤村の『春』(明41・4・7～8・19)、『三四郎』(明41・9・1～12・29)と続けて無事に明治四十一年を終える。漱石は草平の情死行末遂以後、しばらく草平を自宅に住ませ、草平のこれからの身の振り方について、

此男も世の中から葬られたんだから、小説でも書く外に生きる道はなからう(『自叙伝』二)

と考えていた。事件を素材にして小説を書こうとする草平の決意も堅かったし、ために平塚家からの反対交渉にも根気よく立ち会って穩便にまとめようと努力した。漱石がいつ頃草平の起用の考えを固めたか

は判然としないが、明治四十一年十一月二十三日付、鈴木三重吉宛の書簡で「草平氏相変らず煤烟に腐心。」とあり、また三十日付、朝日新聞社内渋川玄耳宛の書簡では、「森田の煤烟が見本丈参り候間入御覧候見本丈でよく分りかね候。新聞に出す積りで回を切つて書いてない様に候。」とあるところから、『三四郎』が連載中の秋頃には草平に話があり、ある程度の分量を書き溜め、書く内容が内容だけに、それを玄耳に見せて採否を仰ぐという慎重な配慮がなされていることが判る。同じ三十日夜に書かれた草平宛の書簡に、『煤烟』朝日の採用する処と相成明日八千号を期し其予告をする由にて相談に参候」とあるから、玄耳はその日のうちにスピーディーに決定したものと思われる。むろん「見本」として送られた分量がどの位あったか、それに推敲がどの程度加えられたのか、など詳細な点については不分明である。

いずれにせよ、漱石の愛情あふるる英断によって草平は起用され『煤煙』の発表となる。それは新進作家としては願ってもない千歳一遇の機会であった。『煤煙』の成立については、本稿の趣旨から外れるのでここでは触れないことにする。以下、『煤煙』に接続し、しかも『自叙伝』に至るラインアップは次のようになっている。

大塚楠緒子『そら炷続篇』（明42・5・18～6・26）

漱石『それから』（明42・6・27～10・14）

泉鏡花『白鷺』（明42・10・15～12・12）

永井荷風『冷笑』（明42・12・13～43・2・28）

漱石『門』（明43・3・1～6・12）

長塚節『土』（明43・6・13～11・17）

『土』の後は、前述の『極光』『自叙伝』そして徳田秋声の『徹』に連なっている。漱石を軸に間断なく登場するこれらの諸作のすべてが読者から好意を以て迎えられたわけではない。風葉の『極光』が不評判であったために、社内から早期掲載終了を強いられたことは、岡保生の『評伝小栗風葉』（昭46・6 桜楓社）が伝えている。『自叙伝』もそれに輪をかけ不評を買った。掲載半ば頃の六月十日、漱石は「日記」に「○会議に出る。森田の小説不評判、半ば弁護、半ば同意して帰る」と書きしるしていることから判明する。風葉と同様、草平も掲載終了を迫られた。漱石と池辺三山の弁護にもかかわらず、七月三十一日、ついに自ら掲載中止の広告文を書いて九十回で連載を終わる。続稿は「新小説」に発表することになっていた。『自叙伝』をめぐるとこの「た、た、た」が引き金となって、主筆三山の辞任に始まり、「朝日文芸欄」の廃止、草平らの解任、さらにはそれらの責任をとってなされた漱石の辞表提出、というぐあいに事態は急速に深刻化した。むろん漱石の辞表はのちに撤回されるが、一門下生が惹き起こした恋愛事件の波紋はさまざまな形状となって及んでいった。

いまこれから『自叙伝』の基礎研究を推進するにあたって、そういう付随的な諸現象は排除したい。『煤煙』『自叙伝』の掲載をめぐる平塚家からの抗議などを含み、それらの事件は、さしあたり草平の文学とは無関係だからだ。『煤煙』『自叙伝』二作は、近代文学史上の大傑

作とはいえないけれども、時代の小説であり、そこに封じ込められている精神的な意義ははかり知れなく大きい。神崎清が『煤煙』に与えた評言を借りれば、「日本の近代文学の冒険と跳躍」<sup>(1)</sup>を如実に示す時代性をになった小説世界を内包しているからである。山田檳榔が「帝国文学」(大4・7)の〈新刊批評〉欄で、

此の『自叙伝』と『煤煙』とは雷に明治文学史上の一異彩たるに止らず、日本文学史上に特別の地位を占む可き物であり、将来永久に文芸批評家の論議に上る可き不朽の作である。

とやや誇張して評価した、そのことは割引いても、依然として「文学史上の一異彩」といえることは確かである。この批評は、『自叙伝』の完成という時点からみると、やや時期遅れのものである。おそらく山田檳榔は大正四年五月二十一日に日月社より刊行された『縮刷自叙伝』を読んで新刊時評としてとりあげたのであろう。好意的な批評例として注目されるものである。

ところで、『自叙伝』に関しては、その前にやらねばならない基礎作業がいろいろある。たとえば次のような不用意な見解が一般的な草平文学に対する認識の浅さを物語っているからである。

『自叙伝』は、大正四年七月、植竹書店から出版するにあたって、新聞連載九十回のうち、四回を捨て、八十六回に、『未練』をつづけて、大団円とした。現形の『自叙伝』九章までが前者であり、十章以下が後者である。些少の削除と加筆とを加えて、首尾をととのえた。(瀬沼茂樹『日本文壇史』19、第八章、昭52・11、講

#### 談社)

瀬沼氏のいわれるように、現在流布している『自叙伝』は、たしかに朝日連載のものと、不評につき掲載中止の憂き目に遭い、しかたなくその後書き継がれて、明治四十四年の「新小説」十月号に発表された『未練』を合わせたものではあるのだが、後で詳しく論述する通り、この記述には少なくともふたつの事実誤認がある。瀬沼氏のいう植竹書院版『自叙伝』が未確認だからここではそのことには触れないが、そうだとすると、『自叙伝』の最初の単行本は、明治四十四年十二月二十日、春陽堂から出版された『自叙伝』(菊版、四三七ページ、背文字、表紙は『小説自叙伝』、橋口五葉装幀)としなくてはならない。この段階ですでに大幅な改稿がなされている。瀬沼氏は「些少の削除と加筆とを加えて、首尾をととのえた」を書いてはいるが、これは文脈からも九章と十章の接続部分についての説明ととるべきであろう。ところが「削除と加筆」はそこばかりではない。新聞発表の九十回についても、随所に大幅な改稿や削除が行なわれているからである。『煤煙』については、浦西和彦氏の「『煤煙』論の前提」(昭47・3、関西大学国文学会「国文学」第46号)が「表現の技巧上の問題だけにとどまらず、その内容にまでおよんでいるところがある」「『煤煙』の改稿」問題について鋭く考察しているが、『自叙伝』については、現在、深く立ち入った研究がない。本稿ではあくまでも『自叙伝』の書誌やテキスト・クリティックの問題を中心に検討を加え、『自叙伝』のみならず、ひいては『煤煙』への展望をひらくことを目論見としてい

る。

## 二、『自叙伝』のテキストならびに改稿の概観

『自叙伝』の構成と異本との関係は、一欄表にしてみると次のようになっている。テキストに付したa~eは便宜的なものである。

章	テキスト				
	a	b	c	d	e
一	(第一回)~八(第八回)				
二	(第九回)~九(第十七回)				
三	(第十八回)~七(第二十四回)				
四	(第二十五回)~五(第三十九回)				
五	(第四十回)~五(第五十四回)				
六	(第五十五回)~八(第六十二回)				
七	(第六十三回)~八(第七十回)				
八	(第七十一回)~八(第七十八回)				
九	(第七十九回)~三(第九十回)				
		五 四 三 二 一			
		大団円	十四 十三 十二 十一 十		
			五 四 三 二 一		
		大団円	十四 十三 十二 十一 十		
				九 八 七 六 五 四 三 二 一	
					九 八 七 六 五 四 三 二 一

テキストの系統としては、疑いもなく、a + b ↓ c であり、e は c を踏まえなければ成立しえない。しかし d は b を底本としても成立しうる。

『未練』(d)は独立した作品として、鈴木三重吉編集発行の『現代名作集』第四篇として、大正三年十二月十五日に出版され、かなり版を重ねた。その「序」で三重吉は『未練』を「独立した短篇」として尊重しており、当時かなり厳しかった版權の問題から考えて、「小説」の初出に依拠したのではないかと思われる。なぜかという点、初出「未練」の中で触れられている『煤煙』の名称が、朝日新聞のときとは違い『××』と数箇所伏せられているからである。草平は、すでに単行本『自叙伝』(c)を刊行する際にその不統一に気づき、bの伏字をすべて起こして『煤煙』として一貫させており、その点から考えてもc ↓ dは成立しにくい。もちろん『現代名作集』では六号の活字を用いているため、読者の読みづらさを考慮してパルビを採用している。したがって、テキストa bの総ルビを踏襲して生かしているのはcだけである。

ところで、「未練」に関しては、b ↓ c (e)の場合も、b ↓ dの場合も、冒頭の一部を整えただけでほぼ初出通りである。これは新聞のように日々回を切つてメ切に追いたてられることもなく、文芸雑誌に一括掲載するという気安さから、じっくりと取り組むことができたからであろう。のみならず、女主人公——作者は「あの女」とのみ書いてその名を明かしていない——との再会、「あの女」の談話、戯曲、書簡等によって深まった幻滅と不信を経て訣別を迎えるという時間の中で、静かに醸された『未練』の情念をかなり客観的に対象化できるようにになったからであろう。要約していえば、初出「自叙伝」での作

者は、「あの女」の「幻影」と格闘し、死物狂いになって書くことによつて自己確認の作業を推進している、『煤煙』執筆時の自己を再現しようとしているがゆえに、それだけ力が入り客観的な立場に立っていないということだ。またそうでなくては『自叙伝』の書かれる意味はないといえよう。たとえば『自叙伝』における『煤煙』執筆のモチーフは、次のような個所に端的に表われている。

併し、最早あの女とは離れた。あの女と離れた上は、私の自由だ。あの女のない代り、私は私の思ふ儘に幻影をつくる、幻影を不朽にする。それに依つて、私は失つたものを取戻すのだ。其外に、私の霊だけでも助けられる道はない。

私は新たな勇気を鼓して、二たび製作に取かゝつた。(初出a、原総ルビ)

それだけにしても、矢張離れる時には離れた。只あの女と離れた上は、私の自由だ。あの女のない代り、私は私の思ふ儘に幻影をつくる。幻影を不朽にする。それに依つて、私は失つたものを取戻すのだ。其外に、私の救はれる道はない。

私は二たび現実の世界から空想の世界へ逃げた。二たび死物狂ひに成つて製作に取かゝつた。(『自叙伝』c、原総ルビ)

この改稿に關してだけでも、決して小さいことではないが、その点についてはいまは触れない。ただこういうのめり込むような自己再現と女の「幻影」の永遠化の情念は、初出の「自叙伝」およびその改稿のなされた第九章までのことであつて、「未練」では鎮静化された情

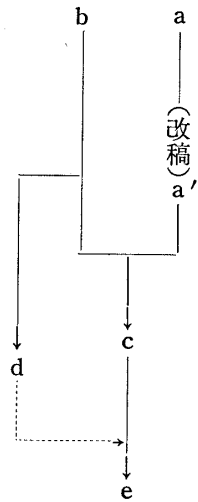
念のくすぶりが間歇的に噴出するのみである。したがって両者の執筆モチーフは厳密に言えば違つてみるとみるべきである。発表形態からみればむしろ連作に近いといえようか。それについては「未練」の発表時から考えられていたことである。明治四十四年の「新小説」九月号巻末にある「新小説十月号予告」では、「続自叙伝」とあり、次のような広告文が出ている。

本篇は主観的作家たる草平氏が身を削り売れるもの、「煤煙」「自叙伝」に次ぐ第三の作である。「自叙伝」が「煤煙」から独立せるものと見れば、これも「自叙伝」から独立したものと見ても可い。「煤煙」から「自叙伝」を離し難いものとすれば、此作も「自叙伝」から離し難いものである。

『煤煙』『自叙伝』『未練』三作が、それぞれ独立しているように見えていて、しかも離し難い関係にある、というところに、草平が体験した人生の重みとそれをどのようにして乗り切ってきたかという恋愛の内在化の問題が横たわっているように思われる。ひとつの痛烈な体験にあくまでも拘執して、草平は三段ロケットを打ち上げるように次々と自伝小説を発表してきた。それは書かなければ「私の救はれる道はない」というパセティックな感情のなせる術であつた。このとき、草平は何を書こうとしたのか、という興味とともに、どのように書こうとしているのか、という関心が自ら湧いてくる。いや、『自叙伝』で書こうとしている「何か」とは単純なことでありたかが知れている。むしろ自分が体験したことをいかに表現するか、どう他者に理解

してもらったらいのか、ということのほうか、『自叙伝』を執筆したモチーフに近い。だからこそ単なる技巧的な改稿ではない内容面におけるテキスト・クリティックの問題が重視されなくてはならないのである。とくに、b↓cの間の改稿が考えられないとすれば、『自叙伝』におけるテキスト・クリティックの最大の問題は、aがどのよう改稿されてcとなったのか、という点に絞られてくる。eの日月社版は、標題も『縮刷自叙伝』と変え、九章以降、『煤煙』を伏字扱いにしたり、パラルビにするなど、僅少なながらcの春陽堂版とは相違している。それらの校異は論ずるに足らないことなのだが、ただ、eのテキストは、九章以後、伏字とパラルビの処置がdのテキストをそのまま踏襲している点から、便宜的に利用したのではないかと推定される。

以上考察したことを図式化すれば次のようになる。



なお、このeには、草平の「自序」と安倍能成・阿部次郎の「自叙伝合評」、阿部の「自叙伝合評補遺」が付せられている。むろんテキストとしては、比較的誤植の少ないcのほうが善本といえるのである

う。

ところで、『自叙伝』の中には、『煤煙』を書き悩んでいる主人公の姿がしばしば描かれている。たとえば、そういう状態は、女主人公が雑誌類に発表する生々しい感想や作品に触れてダメージを受けた後にきまってやってくる。第七章には、或る雑誌に発表された女の脚本『退京』を読んで、自分の考えが甘いひとり勝手に勝手であったのに気づき、「最う悲劇ぢやない喜劇だ、物笑ひだ」と自嘲にかられ、絶望の淵に佇みつつもなお小説の執筆に鞭打つ主人公・私が描出されている。

二三日は、それだけでなくも洩り勝ちの筆がいよ／＼洩つた。原稿紙に向ふのも懶かつた。併し斯う成れば愈々此作の外に頼む所はない、此作の中に自分の長い夢を託して、初めて幻影を固定する外に生きる道はない。

私は今一度綿の様に勞れた身体を起した。余りに筆の洩つた時は、人に顔を見られる耻かしさも忘れて、新聞社へ出かけた。社の輪転機の側で一枚宛書く後から活字に組んで貰った。そんなにして漸く一日分を纏めた。(原総ルビ、以下省略)

こういう感懐と決意は『自叙伝』にいやというほど窺える主調だが、それはさしあたって論外である。注意したいのは、『自叙伝』はおそらく『煤煙』ほどではなかったに違いないが、かなり無理をして執筆されていることである。したがって、表現の細部が意に満たなかったり不用意に筆をすべらせて書きすぎてしまったりしたことが多く

あったということである。だから、草平は、初出のそういう部分を容赦なく加筆修訂している。時枝誠記は、推敲・改稿・別稿の違いを論じ、改稿を「初案と主題を同一にし、内容的に素材的に加除増減を加へる作業である」と定義しているが、むろん若書きの作品にありがちな未熟な表現の推敲——時枝誠記にいわせれば、「草案的作品に手を加へて、より完璧なものに仕立てあげる作業」——もそこに多く含まれている。むしろ改稿的部分よりはそのほうが多いとさえいえる。したがって、作品全体を考察することは無理である。まず第一章にかぎって、作者がどのように改稿しているかを見ることにしたい。ただしその際、脱字や誤植はもちろんのこと、いちいち例を挙げて考察の対象とはしないが、次のような推敲的な諸例が多くあることを念頭に入れておいてほしい。

- (1) 読点（、）の加減
- (2) 改行や行の追い込み
- (3) 変体仮名や踊り字の改変
- (4) 次のような諸例
  - ・追かけて↓追掛けて   ・もの↓者   ・ばたりと↓ばつたりと
  - ・連て↓連れて   ・引還して↓引返して   ・言↓云   ・歩行いて
  - ↓歩いて   ・や↓稍   ・死骸↓死骸   ・内↓自宅
- (5) その他、論及するまでもない小部分の改訂。たとえば、

・此松山の麓↓此山の麓  
 ・まんじりともせんから↓まんじりともせん

一般的な常識から考えると、連載小説の場合、作者はかなりの枚数を書き溜めているのが普通である。だから冒頭部の改稿などはよほどことがないかぎり行なわれないのが通例であろう。むろんそうでないこともあるから一概にはいえないが、草稿における段階での推敲の機会は、連載が進行中のときよりは多いため、かなり決定稿に近い形で読者に提示される、とはいえると思う。『自叙伝』の場合もそうである。しかし改稿された個所がまったくないわけではない。草平の文章意識・文体意識をも含めて、いくつか主なもの列挙して考えてみよう。引例中にある（ ）は削除、へは加筆、「」は改訂をそれぞれあらわし、文末の（一）（二）は、新聞初出における第一章第二回を示している。原文は総ルビだが、適宜パラルビとした。

- (a) 一夜〔晩〕中追跡されて居るとも知らずに居たのか。（何だか）斯う成つたのも自分一人の所為の様に思はれて（、）間の悪さの持つて行き所がない（やうな感に堪へぬ）。（一）（二）
- (b) 「……いや、あの嬬アめ、（実に）怪しからん奴ぢや。彼れ程訊くのに向（そんな人達や）見掛けませんなんて「見掛けませんぞと」、図太くしらを切りやアがつた」 （一）（三）
- (c) 裏の方から色白の若い女が出て来て、六つ位の男の児が煩さく乳房に縋るのを賺し、婆さんと二人して、へ女の脱いだ上着の、袂や裾を引張合ひながらへ、焚火で乾かして呉れた。
- (d) 不意に入口の戸をこつくと叩くものがある。私は湯の中に浸

（一）（三）

つたまゝ振向いた。三寸程開けた戸の隙間からへ、女は半身を露はして「女の乳房から上が見えたが、あわてゝ引込み相にしながら」「彼方は湯がまるで水の様で、それに垢が一杯浮いてるから堪まらないの。」

(一の四)

(e) 「紐でも可い、何んな紐でも」と、女は仰向けに成つたまゝ言つた。

此時位私は女の言葉のブルガリテイに「女の言草の俗悪なのに」打たれたことはない。又此時位痛切に自分の遣つて居ることが一種のエキスペリメント「一種の遣つて見づく」だなと感じたこともない(。)—私は冷たい風が通つたやうな心持がして、思はず手を離した。

(一の五)

以上の引例からも明瞭なように、全体的に初出の冗漫かつ不必要な部分を削ぎ、不正確で曖昧な描写・叙述の部分を加筆訂正する方向に向かっていることが判るであろう。

(a)は、私と女が巡査達の搜索隊によって発見された直後の私の独白、(b)は茶店の女に一杯食わされて腹を立てている巡査の言葉、(c)は、保護された私達の一行が別の茶店で休憩し、雪の山中で濡れた女の着物を乾かしてもらっている叙述、(d)は、塩原温泉の旅館に到着し、突然女が湯に浸っている私に語りかけてくるきわどい部分、(e)は、宇都宮まで来ている女の母親が旅館まで迎えに来る前に、未遂に終わった心中をこの場で実現しようと、黒髪を解いて迫ってくる女の激しい情念と、女の首に手をかけながらも、「ラブ」「恋」のために

死ぬとは決して言おうとしない女のエゴとその言葉の俗悪さに白けてしまつて、それを実行することがどうしてもできない男の感懐が描出されている所、をそれぞれ示している。改稿後のテキストによって、たとえば(b)では、会話文がやや引き締まっていることが判るし、(d)では、女の慎しみ深さが書き加えられた反面、その直後に男の期待を裏切つてその場から急に去つてしまう女の言動が、この小説を一貫してつらぬいている女の謎・女の不可解さを象徴するものとしていちはやくしかも鮮やかに対比・強調されるという効果をみごとにあげているのが理解できるであろう。また、(e)の例にも窺えるように、初出にあった主として英語による原語表記は、改稿の段階で大幅に後退している。第一章では他に、「セルフ、サクリファイイス」が「自己犠牲」に、「ラブ」が「恋」にそれぞれ変更されているが、「シックエンス」などはそのままである。どういふ基準で行なわれたのか、そこには統一性はないが、いまいくつかそれを列挙してみることにしよう。

〈改変〉 ブルータル、サイド (獣に似た側) エキザツゼレート

(誇大) ロジック (論理) ファクトル (要因) パツシヨ子エ

ト、フレンジイ (物狂ほしい情熱) プライド (衿持) サルドニ

ツクナ (悪魔のやうな冷やかな) ヒポクリット (偽善者) コー

ケツト (男蕩し) アフェクシヨン (愛情) ……

〈不変〉 イムプレツシヨン スチューピッド アンフェボラブル

ジュラス ナツシング ……

おそらくこれらの原語の頻出状態から、東京帝国大学英文科出身の



知性の氣負いとともに自伝小説における韜晦の心理を読み取ることはたやすいことである。改稿の段階でそれに気づき、つとめて修訂しようとしたことは明瞭であろう。公器的な新聞への発表から単行本上梓へのプロセスが、またそれを容易にしたと考えられる。しかし(e)の「遣つて見づく」「エキスペリメント」などは、改変にかかわりなく、『自叙伝』中でも重要なタームとして注目されるべきであろう。

なぜなら『自叙伝』は、「自分で遣つて見なけりや解らぬやうな、奇妙な病」(九の十二)にとりつかれてしまった人間の経験談でもあるからだ。作中の随所に散見する「遣つて見づく」という表現は、作者にとって「エキスペリメント」という言葉ではいかにも軽々しく、肉體性を伴わないものと印象されたのであろう。

ところで、以上のような比較的微小な改稿とは違う大幅なそれほどようになされているであろうか。同じく第一章についてみてみることにする。

(f) 「貴方は——最一度家が出られるか。」

「出られます。」

「屹度？」

「は「え」ゝ屹度。」

斯う言ひながら女は自分で何を云つて居るか知らないやうな風に見え「え」た。(何だか)互に出来ない事を出来ないこと知りながら約束しへて居るやう「様」な氣もした。へ女も白けた容子に氣が附いたのか、急に振回つて、「出られる、屹度出られる」

と声に力を入れたが、又うつとりとして黙つて仕舞つた。〷

(一の四)

(g) 女は二たび鏡台に向つてへ、東ねた「一度解きかけた」髪を解きにかゝつたが、急に振向いて、

「今の間に——何処へも行かないで、此の場で。」

「此場で？」

「最う母なぞに会はない。」

へ斯う云つて、男の膝に顔を伏せた。死を決した男にしなだれかゝる有様程、何とも言様のないものはない。

女の異議を許さぬ顔色を見ると、私は思はず一握りの髪を掴んで、ぐる／＼と女の頸に捲きつけて見たが、

「髪の毛が短くて足りない。」

(一の五)

(f)(g)二例は、かなり作品の本質的な問題にかかわり合っている改稿である。女の側からみれば、家出と自殺行は、それだけでも決死的な覚悟をもったものであり、家に対する大胆な挑戦であり不退転の行爲であった。親の許に連れ戻されたら、二度とふたたび家を出ることなどできそうにないと思うのは当然であろう。(g)のように母親が到着する前に決然と死を選んでしまうことが、遺書に「我生涯のシステムを貫徹す、我が Cause によつて斃れしなり、他人の犯す所にあらず。」と書き残してきた自己の思想の最も自然な帰結であり実践を意味した。〈恐れぬ女〉は必死に髪を解き、〈恐れる男〉にしなだれかかり死を迫ってくる。(g)の加筆部分にある「死を決した男」は、「女の異

議を許さぬ顔色」に比して、いかにも実体のない弱々しい表現となっている。男のほうとしては、お互いの「恋」の燃え上るその至楽の果て、身心共絶頂をきわめた一体感に充足されつつ死を迎えようという考えを持っており、心中するところまで来ていながら、相手と一体となろうとしないエゴの核に拘わり、愛情の齟齬に気づき始めている。だから作者は、(f)に続けて次のように書くのである。

大宮に泊つた夜、あの夜から冷たい白い物が二人の間に立つた。

何物かそれは知らぬ。只心中する男女と云ふものはこんなものぢや有るまい。だが、そんな事を云つた所で仕方がない。最早今と成つては無理にも行く処まで行く外はない。

私(男)が女との間に横たわる「冷たい白い物」に意識的になり拘泥し始めたとき、もはや二人の関係は破綻をきたしていたとみてよい。のちの有島武郎の言葉を借用していえば、「定命の死」(『惜しみなく愛は奪ふ』)つまり男女の相愛の極限における死を希求していた私は、ここからひとつの錯誤の道を歩み始める。だがここではそういう死を実現することにすべてをかけていた。だからもう一度女の家出を要求する。しかし女のほうは、追いつめられた状況の中であって、あくまでも自己の哲学的な死の貫徹を願ひ、私にこの場での処決を迫っているわけである。

こうみてみると、『自叙伝』の興味は、主人公である私がいだく相愛の死と女のいだく哲学的な死との相剋にあり、それをめぐって一組の男女の意識と行動がどのような展開をみせるか、というところにあ

る。しかしこの問題は、ジャーナリズムが待ち受けていたスキャンダルという陥穽に二人を落とし込み、充分な発展をみることなく終わってしまう。いずれにせよ、(f)(g)などにみられる大幅な加筆のねらいは、

(1) 新聞発表のとき、抑制した描写をより具体的に描出するように心掛けること

(2) 「女」の造型にはより繊細な配慮を施しリアルな再現を目指すこと

(3) 作品を貫くテーマに言及するときは、反復を恐れず繰り返し納得のゆく叙述をしてみることに

などに集約されている。一方、主だった削除は、不用意に書きつけた自作『煤煙』の感想や与謝野晶子の煤煙事件に暗示を受けて書かれたとされる戯曲の批評、執筆中の楽屋話めいた部分、「未練」との接続の箇所、などでかなりの枚数になっている。『自叙伝』全体におけるそれらについての改稿問題は、次章において分析することとした。

注(1) 『名作とそのモデル』(昭25・9 東和社)一四二ページ、「煤煙・森田草平」の項。

(2) 『文章研究序説』(昭40・5、第4版、山田書院)一五二ページ。

\*本稿は、跡見学園特別研究費の助成にもとづくものである。